

初夢

正岡子規

青空文庫

(座敷の真中に高脚の雑煮膳が三つ四つ据えてある。自分は袴羽織で上座の膳に着く。)

「こんなに揃って雑煮を食うのは何年振りですか。実に愉快だ、ハハ―松山流白味噌汁の雑煮ですな。旨い、実に旨い、雑煮がこんなに旨かつたことは今までない。も一つ食いましょう。」

「羽織の紋がちつと大き過ぎたようじゃないア。」

「何に大きいことはない。五つ紋の羽織なんか始めて着たのだ。紋の大きいのは結構だ。(自分は嬉しいので袖の紋を見る。)

仙^{せんだい}台^{たい}平^{ひら}の袴も始めてサ。こんなにキュウキュウ鳴ると恥かしいようだ。」

「お雑煮をも一つ上げよか。」

「もうよございませす。屠^{とそ}蘇^そをも一杯飲もうか。おいおい硯と紙とを持って来い。何と

書てやろうか。俳句にしようか。出来た出来た。大三十日愚なり元日なお愚なりサ。うまいだろう。かつて僕が腹立紛れまぎに乱暴な字を書いたところが、或人が竜飛鰐立りょうひがくりつと讃めてくれた事がある。今日のも釘立ち蚯蚓飛ぶ位の勢は慥たしかにあるヨ。これで、書か初めきぎもすんで、サア廻礼だ。」

「おい杖を持て来い。」「どの杖をナ。」「どの杖ててまさかもしゆもくづえう撞木杖なんかはつきやしないヨ。どれでもいいステツキサ。暫く振りで薩摩下駄を穿はくんだが、非常に穿はき心地がいい。足の裏の冷や冷やする心持は、なまゆるい湯婆たんぼへ冷たい足の裏をおつつけて寒がつていた時とは大違いだ。殊に麻裏草履あさうらぞうりをまず車へ持ててもらつて、あとから車夫におぶさつて乗るなどは昔の

夢になったヨ。愉快だ。たまらない。」（急いで出ようとして敷居に蹶つまずく。）「あぶないぞナ。」「なに大丈夫サ、大丈夫天下の志サ。おい車屋、真砂町まさごうちょうまで行くのだ。」

「お目出とう御座います。先生は御出掛けになりましたか。」

「ハイ唯今出た所で、まア御上りなさいまし。」「イヤ今日は急いでいるから上りません。」「あなたもうそんなにお宜しいので御座いますか。この前お目にかかった時と御形容ごようすなんどがたいした違いで御座います。」「病気ですか、病気なんかもう厭あき厭きしましたから、去年の暮にすっかり暇をやりましたヨ。今朝起きて見たら手や足が急に肥えて何でも十五貫位はありましようよ。」

「そうですか、それは結構で御座います。まアお上りなすつて、

屠蘇を一つさし上げましょう。」「いや改めてゆつくり参りましょう。サヨナラ。おい車屋、金助町だ。」

「ヤアこれは驚いた。先生もうそんなにお宜しいのですか。もうお出になつても宜しいのですか。マアどうぞ、サアこちらへ。」

（座敷へ通る。）「お目出とう御座います。旧年中はいろいろ、相変りませず。」「お目出とう御座います。」「今朝もお噂うわさを致して居りましたところです。こんなによくおなりになるうとは実に思い懸がけがなかつたのです。まだそれでもお足がすこしよろよろしているようですが。」「足ですか、足は大丈夫ですヨ。すこし屠蘇に酔つてるんでしょう。時にきよようの飾りはひどく洒落しゃれていますな。この朝日は探幽たんゆうですか。炭取りに枯枝を生けたので

すか。いづれまた参りましょう。おい車屋、今度は猿楽町だ。」

「や、お目出とう御座います。留守ですか。そうですか。なるほどこういう内ですか。」「まアあんさんちよつとお上りやす。」

「いいえ急いでいますから……私の書生の頃この隣の下宿屋にいたのですが、もう十四、五年も前のことですから、この辺の様子はすっかり違っていますヨ。サヨナラ。」

「おやお珍らしゆう、もうそんなにすっかりお宜しゆう御座いますので、まアお上りなさいませ。（座敷に通る。）お目出とう御座います。旧年中は……相変りませず。」「お留守ですか。」

「ハイ唯今河東さんがお出になつて一緒に出て行きました。」

「マーチャンお目出とう。」「マーチャンお辞儀おしなさい。こ

のおじさん知っていますか。オホンオホンじいちゃんかネー御病気がすっかりよくおなりなすつていらしたのだからお辞儀をしなくちやいけません。」「マーチャンはことし四つになつたんでしよう、そうしてあかチャンの姉チャンになつておとなしくなつたからこれをあげるヨ。」「おやいいものを戴いたいて、この中には何が這入つてるだろう、あけて御覧なさい。おやいいもんだネー。オヤもうお帰かえりでございますか。」

「おい君暫しばらく逢あわなかつたネー。」「やあ珍らしい。まアお目出とう。」「君はいつから足が立つようになったのだ。僕は全く立たと聞いていたが。」「なに今朝から立つたのだヨ。今朝立つて見たら君、痛みなどはちつともないのだもの。」「そうか、

そりや善かった。大変心配していたんだヨ。もうとてもいけないだろうツて、誰れか言つた位であつたから。」「しかし君は何処へ行くんだ。」「そうか、それじゃ僕も一緒に行こう。」「もうひる午じやが君飯食わないか。」

「それじゃ一緒に食おう。」

「これか、新橋ステーシヨンの洋食というの。とにかく日本も開らけたものだネー。爰ここ処へこんな三階作りが出来て洋食を食わせるなんていうのは。ヤア品川湾がすっかり見えるネー、なるほどあれが築ちっこう港の工事をやっているのか。実に勇ましいヨ。どしどし遣らなくつちやいかんヨ。」「君はどの汽車に乗るのだ。」

「僕は二時半の東海道線だが、尤もつとも本所へも寄つて行きたいのだ

が、本所はずれまで人力で往復しては日が暮れてしまうからネ。」
「本所へ行くなら高架鉄道に乗ればよい。」
「そうか。高架鉄道があるのだネ。そりや一番乗つて見よう。君この油画はどうだ非常にまずいじゃないかこんな書き方つてないものだ。へーこれは牡丹の花だ。これがいわゆる室咲むろざきだな。この頃は役者が西洋へ留学して、農学士が植木屋になるのだからネ。」
「オイオイ君ソツプがさめるヨ。」
「なるほどこれは旨うまい。病室で飲むソツプとは大違いだ。」

(ジャランジャランジャラン)

「寝台附の車というのはこれだな。こんな風に寝たり起きたりしておれば汽車の旅も楽なもんだ。この辺の両側の眺望はちつとも

昔と変らないヨ。こんな煉瓦れんがもあつたヨ。こんな庭もあつたヨ。松が四、五本よろよるとして一面に木賊とくさが植えてある、爰ここだ、爰ここだ、イヤ主人が茶をたてているヨ、お目出とう、（と大きな声をする。）聞こやしないや。ここは山北だ。おいおい鮎あゆの鮎すしはないか。そうか。鮎あゆの鮎すしは冬はないわけだナ。この辺を通るのは、どうもいい心持だ。ここが興津か。この家か、去年の秋移ろうかといったのは。なるほどこれなら眺望がいいだろう。」（大阪の連中が四、五人汽車の窓の外に立っている。）「先生お目出とう御座います。くくくくくく。」「ヤアお目出とう御座います。諸君お揃いで。」「今東京から電報が来たもんですからお出迎えに来たのです。」「そうですか、それは有難う御座いますが、ち

よつと国へ歸つて来ようと思ひますから、歸りによりましょう。

そうですか。サヨナラ。」

「おい車屋、長町の新町まで行くのだ。十二長町の新町といつてはもう通じないようになったのか。それならば港町四丁目だ。相変らず狭い町で低い家だナア。」

「アラ誰だと思ふたらあのぼさんかな。サアお上り、お勞れつろ、もう病氣はそのいによろおなりたのか。」（座敷へ通る。）「アラおまいお戻りたか。」「マア目出とう。おばアさん相変らず御元氣じゃナア。」「いいエおばあはもうぼれてしもてなんの益やくにもたたんのヨ。」「おいさんはお留守かな。」「おいさんは親類だけ廻るといふて出たのじゃけれ、もうもんで来るじゃある。」

「それじゃアあたしも親類だけ廻つて来よう。道後どうごが奇麗になつたそんなア。」「そうヨ、去年は皇太子殿下がおいでになるというてここも道後も騒いだのじゃけれど、またそれが止やみになつたということ、皆精を落してしもうたが、ことしはお出になるのじゃというて待つておるのじゃそんな。」「それじゃちよつと出て来よう。」「マアお待ちやおかんざけ酒さけだけしようわい。おなかですいたらお鮓すしでも食べといき。」「いいエもうええ。」「そんならすぐもんでおいでや。こよいはうちへお泊りはかりるのじゃあろうナア。」「こよいかな。こよいは是非ぜひ東京へ帰つて活動写真を見に行く約束があるから、泊るわけには行かんが。」「そのいにお急ぎいそぎるのか。」「そうヨ、今度はちよつと出て来たのだから……

…とにかくうちの古い家を見て来よう。」

「オヤオヤ桜の形勢がすっかり違ってしまった。親桜の方は消えてしまつて、子桜の方がこんなに大きくなつた。これでこの子桜の年が二十二、三位になるはずだ。ヤア松の梢こずえが見える。あの松は自分が土手から引て来て爰ここ処へ植えたのだから、これも二十二、三年位になるだろう。あの松の下に蘭があつて、その横にサフランがあつて、その後ろに石があつて、その横に白丁はくちようがあつて、すこし置いて椿つばきがあつて、その横に大きな木犀もくせいがあつて、その横ほこらうに祠ほこらうがあつて、祠の後ろにゴサン竹といふ竹があつて、その竹はいつもおばアさんの杖つえになるので、その筍たけのこは筍のうちでも旨い筍だということであつた。そのゴサン竹の傍しやうぶに菖しやがも咲けば著しやが裁がも

咲く、その辺はなんだかしめつぽい処で薄暗いような感じがして
いる処であつたが、そのしめつぽい処に菖や著莪がぐちやぐちや
と咲いているということが、今に頭の中に深く刻み込まれておる
のはどういふわけかわからん。とにかく自分が二つの歳から十六
の歳まで毎日毎日見たり歩いたりしていたこの庭が、今はどんな
になっているであろうか、ちよつと見たいと思うけれど、今は他
人の家になっておるのだから仕方がない。垣から覗のぞいて見ようと
思うにも、川の隔てがあるからそれも出来ん。」

「ヤア目出とう。お前いつお帰したか。」「今帰つたばかりサ。
道後の三階というのはこれかな。あしやアこの辺に隠居処を建て
ようと思うのじやが、何処かええ処はあるまいか。」「爰処はど

うかな。」「これではちつと地面が狭いヨ。あしやア実は爰処で陶器をやるつもりなんだが。」「陶器とはなんぞな。」「道後に名物がないから陶器を焼いて、道後の名物としようというのヨ。お前らも道後案内という本でも拵こしらえて、ちと他国の客をひく工く面めんをしてはどうか。道後の旅店なんかは三津の浜の舢はしけの着く処へ金字の大広告をする位でなくちやいかんヨ。も一歩進めて、宇品の埠頭ふしとうに道後旅館の案内がある位でなくちやだめだ。松山人は実に商売が下手でいかん。」

「なるほどこりや御城山に登る新道だナ。男も女も馬鹿に沢山上つて行くがありやどういいうわけぞナ。」「あれは皆新年官民懇親会に行くのヨ。」「それじゃあしも行って見よう。」（向うの家

の中に人が大勢立つて混雑している。その中から誰れやら一人出て来た。」「おい君も上るのか。上るなら羽織袴なんどじやだめだヨ。この内で著物を借りて金剛杖を買つて来たまえ。」「そうか。それじゃ君待つてくれたまえ。（白衣に著更きかえ、金剛杖をつく。）サア君行こう。富士山の路は非常に険だと聞いたが、こんなものなら訳はないヨ。オヤ君は爰ここに写生していたのか。もう四、五枚出来てる？、それはえらいネー。もう五合目い来たのか。とにかくあしこの茶屋で休もうじやないか。ヤア日本茶店と書てある。何がある。しる粉がある？。それならしる粉くれ。頻しきりに皆立って行くじやないか。なんだ。日の出か。なるほど奇麗だ。赤いもんがキラキラしていらア。君もう下りるか。それじゃ僕も一

緒に下りよう。なるほど砂をすべって下りるとわけではないヨ。マア君待ちたまえ、馬鹿に早いナア。（急いで下りるつもりで砂をふみ外して真逆様に落ちたと思うと夢が覚めた。）

* * * * *

目を明いて見ると朝日はガラス戸越しに少しくさし込んで、ストーブは既に焚きつけてある。腰の痛み、脊の痛み、足の痛み、この頃の痛みというものは身動きもならぬ始末であるが、去年の暮の非常に烈しい痛が少し薄らいだために新年はいくらか愉快に感ずるのである。アアきょうもエー天気だ。

〔『ホトトギス』第四卷第四号 明治34・1・31〕

青空文庫情報

底本：「飯待つ間」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年3月18日第1刷発行

2001（平成13）年11月7日第10刷発行

底本の親本：「子規全集 第十二卷」講談社

1975（昭和50）年10月刊

初出：「ホトトギス 第四卷第四号」

1901（明治34）年1月31日

※底本では、表題の下に「子規子」と記載されています。

入力：ゆうぎ

校正：noriko saito

2010年5月19日作成

2011年5月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

初夢

正岡子規

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>